

Materials Development for TESOL

Freda Mishan・Ivor Timmis 著 (2015)

EDINBURGH University Press 218pp.

杉内 光成

獨協埼玉中学高等学校

教員にとって授業を行なう際になくてはならないものが教材である。しかし、その重要性とは裏腹に、教材デザインは研究分野としてあまり光を当てられることはなかった。そのような現状に対して、教材デザインとは何か、という命題を突き詰めていくのが本書であろう。

本書は、現在の英語教育における教材デザインについて批評的に評価・分析する観点を提示したものである。第1章では教材デザインを専門的に分析する意義や教材デザインの定義などについて書かれており、第2章では教材デザインの原理について概略を示している。詳細に説明されている。第3章では英語教育における教材デザインを文化・コンテクスト的観点から探求している。第4章では教材の評価や応用について、第5章にはテクノロジーを使用した教材について様々な角度から説明されている。第6章、第7章では4技能のトレーニングのための教材に、第8章では語彙と文法を扱うための教材に焦点を置いている。第9章には教材を作る過程とそのポイントについて平易に書かれている。そして、最後の第10章において全体のまとめを簡潔に述べて、本書を締めくくっている。

まず、第1章は、教材デザインを研究する意義を述べている。それは、**Materials development** という研究分野を学ぶことで、現在ある教材をどのように分析し、それを発展させていくにはどのような原理に基づいていけばよいかの青写真を描くことができるということだ。ただ何となく経験則などを頼りにして作っていた教材を、語学教育や言語習得の観点から分析して発展させていくことは、今後の英語教育の発展には欠かせないポイントになるだろう。

第2章では、教材デザイン作成の核になる原理、SLAについて説明をしている。なぜならば、SLAを知っていることが言語学習の教材を作るときの根底となる原理だからである。

第3章では、どの英語・どの文化・どの教育学に焦点を当てて教材を作成するかについて書かれている。確かに英語を教える国や地域によって様々な点を考慮しなければいけないことは事実であるが、本書では、グローバルスタンダードとローカルニーズの共通点を

見出し、教材に盛り込んでいくということが大事であると述べている。

第4章は教材の評価の仕方について **Pre-use evaluation**、**Whilst-use evaluation**、**Post-use evaluation** と段階を踏んだ評価を提唱している。また教師だけでなく、学習者が教材を評価することの重要性や、良い教材を評価し、それを自身の授業に応用していくことについて言及をしている。

第5章は、最近注目されてきているテクノロジーを利用した教材を扱っている。ここでは教材を作る際にコーパスを使用したり、Facebook など SNS のやり取りを参考にしたりなど、例として図を示して説明をしている。

第6章では **Reading・Listening** というインプット能力を養う教材を認知的能力 (**Remembering, Understanding, Applying, Analyzing, Evaluating, Creating**) 別に、具体的なアクティビティ例を提示している。一方、第7章では **Speaking・Writing** というアウトプット能力を養うための教材について、シラバスデザインからトレーニングの方法論まで幅広く説明されている。さらに、それらを教材に落とし込む際の例を提示されている。

第8章では、語彙や文法をコンテキストにフォーカスした形でアクティビティの具体例を紹介している。さらに、教材作成の根底に流れる原理について簡潔に説明されており、教材を作成・応用する際の助けになる。

第9章は、実際に教材を作成するときどのような過程を経ることが適切であるかを、**Statement of beliefs, Needs analysis, Aims and objectives, Syllabus design, Drafting, Piloting, Production, Revision** という観点から述べている。

本書で特筆すべき点として、現場の教員という立場から考えると、教材を評価するときの観点をはっきり提示しているというところである。**Communicative** であるか、**Aims** ははっきりしているか、**Teachability** は確保されているか、**Available add-ons** は考えられ得るか、**Level** は適切か、**Your impression** は入っているか、**Student interest** は考慮されているか、**Tried and tested** される場面は含まれているか。以上の点をまとめて、本書では **CATALYST** と呼んでいる。これらを教材作成時に考慮することが、その時に応じて適切な教材を作るときに参考にできる。また、語彙・文法のアクティビティ例も非常に参考になるだろう。現場において、語彙・文法学習では、ドリルにひたすら取り組む光景が一般的なように考えられるが、その現状に一石を投じるものになると感じられ、さらに明日にでも授業で使用できるくらい汎用性が高いアクティビティ例の提示である。

注目されているとは決して言えない「教材研究」という分野ではあるが、授業を考える上で現場の教員にとっては避けて通れない分野をまとめた一冊である。